流通科学大学　高等教育推進センター紀要　第３号，29-43（2018）

多様な場面で応用可能な課題遂行能力育成のための フィールドワークの可能性検証Ⅰ

Verification of the Validity of the Fieldwork for Training the Assignment Accomplishment Ability under Diverse Circumstances I

池田曜子*、三谷哲雄†
Yoko IKEDA　Tetsuo MITANI

本研究は、社会で求められる課題遂行能力の育成に焦点を当て、フィールドワークを継続的に取り入れた４年間の段階な教育プログラムの構築を目的としている。本稿はその一環として、本学の気づきの教育でフィールドワークプログラムを体験した学生を対象とし、フィールドワークを伴う課題演習を試行し能力育成の可能性を検討した。結果、フィールドワークを複数経験することが能力の育成に一定程度有効であることが確認された。

キーワード　：　フィールドワーク、課題遂行プロセス、能力育成

Ⅰ．はじめに

現在、技術革新に伴い第三次産業が拡大した結果、これまで以上に多様な能力が求められる社会となっている。これまで、将来の社会的地位決定には、学力や各種技能とそれに付随する努力という、習得や計測が可能なメリトクラティック（能力主義的）な基準で将来が決定するとされてきた。しかし、近年、本田（2008）が提唱している「ハイパー・メリトクラシー」段階に移行しつつあると考えられる。この「ハイパー・メリトクラシー」とは、「現代は意欲や創造性、独自性、コミュニケーション能力など、非知的で人格と直結し習得や計測の困難な『ポスト近代型能力』、日本の文脈で言えば、『人間力』的な要素が、個人の地位達成において重要化する」（本田 2008 p.29）社会のことを表わしている。このような社会変化の背景には、グローバル経済化やサービス経済化などの産業構造の変化だけでなく、ライフスタイルの変化による少子化や進学率の増加による価値観の変化も含まれるだろう。

現在、企業において必要とされる人材に関しては、様々な研究が行われている。例えば、東証

* 流通科学大学人間社会学部、〒651-2188　神戸市西区学園西町３－１
† 流通科学大学経済学部、〒651-2188　神戸市西区学園西町３－１

（2018 年 1 月 24 日受理）
©2018 Center for Promotion of Higher Education

一部上場企業と岡山大学に求人依頼のあった企業を対象に行った宮道・三浦ら（2013）が行った調査結果は、つぎのとおりである。企業の規模単位ごとに求める能力の上位をあげてみると、従業員数 1000 人以上の企業は、1 位．基礎学力、2 位．協調性、3 位．行動力、4 位．ストレス耐性、5 位．意欲、6 位．素直さとなっている。従業員数 300 ～ 1000 人未満では、1 位．基礎学力、2 位．協調性、2 位．行動力、4 位．意欲、5 位．明るさ、6 位．素直さとなり、従業員数 300 人未満では、1 位．素直さ、2 位．意欲、3 位．基礎学力、3 位．行動力、5 位．協調性、6 位．明るさとなっている。

このような社会や企業が求める能力の特徴を順にみていくと、これまで通りの学力や技術だけでなく、社会関係資本を形成する能力や、業務や課題に対して自ら問題を発見しその解決のために積極的に最後までやり遂げる能力も求められていることがわかる。

そこで、我々は、これからの社会で求められると考えられる能力や、フィールドワークを経験することによって身につくと考えられる業務や課題を遂行するために必要な能力を想定し、図１のようなプロセスに整理した。この場合、課題遂行能力とは、それぞれのプロセスを実行する能力のことである。このような能力を身につけていくには、これまでの大学教育で行われてきたような学問的な知識だけでなく、その知識を活用した課題遂行能力の育成も重要となる。しかし、この能力は、講義によって身につけることや即時に身につけることは困難なものである。大学４年間の中で学生自身の継続的で多様な経験を通した学びによって徐々に形成されるものと考えられる。

本学では、次章で詳しく述べる独自の初年次教育として実施している「気づきの教育」の中で、フィールドワークを取り入れた教育プログラムを実施している。

フィールドワークは、民俗学をもとに発展し、自然科学系の学問領域で用いられるフィールドワーク技法と区別して社会科学系の学問領域においても様々な技法が研究対象となってきた。実際、ヨーロッパやアメリカでは、「フィールドワークが一種の

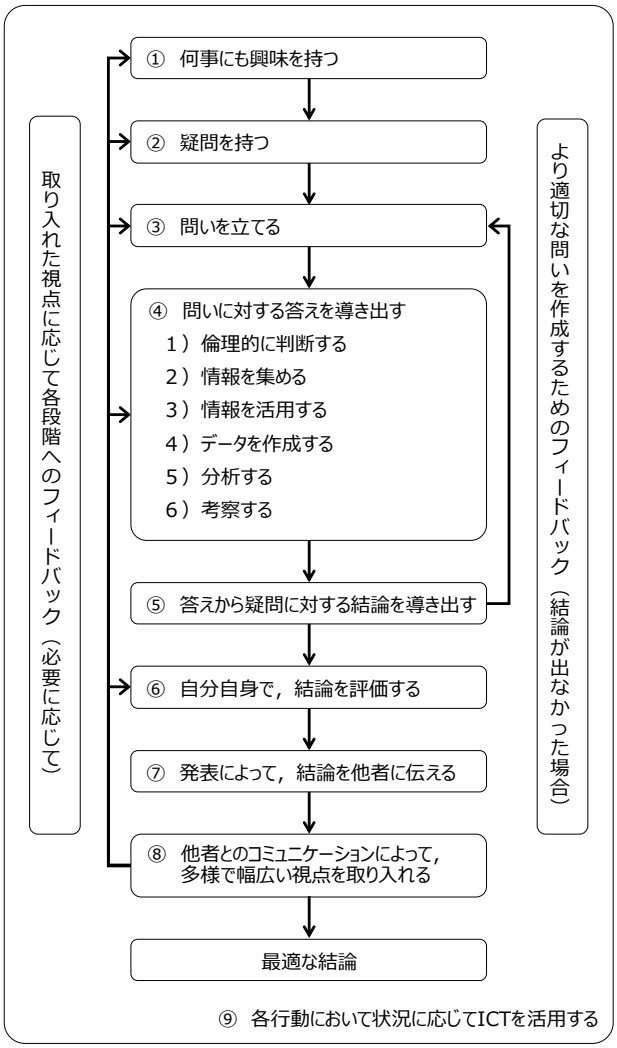

図１　想定した課題遂行プロセス

『産業』と呼べるほど盛んに行われて」（佐藤 2002 p.31）おり、参与観察やエスノグラフィー、インフォーマル・インタビューなどと用語を使い分けなくてはならない程、様々な分野で活用されている。このように現場へ赴き、大学の授業から得られる以上のことを学ぶ機会としてフィールドワークは、多くの可能性をもった方法であることは間違いない。

よって、「気づきの教育」の中で行われているフィールドワークプログラムは、単なる観察や提案のみを主体とした授業や特別プログラムとは異なり、フィールドワークでの経験とともに、自ら設定した問題意識のもと、倫理的配慮についても学び、現場で目的を持った観察を通して自ら気づく力の意義を知りそれを身につけると共に、グループでの活動を通してグループワーク力やコミュニケーション力、人前での発表を通してプレゼンテーション力を高めることを目的としたものである。このように、自ら気づく力、様々な行動する力などの課題遂行に不可欠な能力の基盤づくりも担っている。１年時にこうした教育プログラムを体験していることは、以降の学びにおける学生の実践能力の更なる成長の可能性を高めると考えられる。さらに、獲得された能力は、２年以降の専門領域での学び、アクティブラーニングや社会共創活動などの実践的な学びにおける基盤となり得る。

しかしながら、本学独自の取り組みであるこのような課題遂行能力の育成を目的とした教育プログラムは、現時点では 1 年生前期の「気づきの教育」でしか行われておらず、１年後期以降に対応した科目がなく、「気づきの教育」での経験を生かし発展させることができない状態となっている。

こうした状況をふまえ、著者らは、「気づきの教育」での経験を基盤として、大学４年間の各段階に対応し、継続的にフィールドワークを用いた課題遂行能力の育成のための教育プログラムの作成を目的として研究に取り組んでいる。

本稿は、この研究の一環として、課題遂行能力の育成へのフィールドワークの可能性の検証を目的としている。具体的には、本学の「気づきの教育」で全学生に対して実施されているフィールドワークの特徴と共に、それを通して育成される可能性のある能力について整理した。そして、それを受けて 2016 年度後期に、気づきの教育を経験した本学の１年生と２年生（いずれも 2016 年度時点）を対象としてフィールドワークを伴う課題演習を試行した。さらに課題演習の結果と能力について考察すると共に、学生へのフィールドワークを通して育成される能力についての質問紙調査の結果を考察した。

Ⅱ．本学の気づきの教育におけるフィールドワーク

本章では、本学の「気づきの教育」の主幹科目として１年前期に開講されている「自己発見とキャリア開発」の中で実施されているフィールドワークプログラムである「気づきのフィールド演習」の概要を、2015 年度以降の講義で使用された資料 [4)5)6)] をもとに整理する。

１．「気づきの教育」と「自己発見とキャリア開発」の概要

本学の「気づきの教育」は、学生自身による自発的で積極的な活動を伴う多数の経験を通して得られる様々な「気づき」から、一人一人の「なりたい自分」を探し、そこから将来の夢や目標を定め、本学での４年間の学びを充実させ、意義あるものにするための教育プログラムの総称である。その主幹科目として実施されている「自己発見とキャリア開発」は、１年後期以降の様々な学びに備え、その「基盤」を形成するため１年前期に配置され、全学生が履修する。講義は、40 名程度のクラスに分かれて同じ内容で実施されている。また講義は、週２日の決められた曜日の１限から４限の連続（2015 年度、2016 年度）もしくは１限と２限の連続（2017 年度）で開講されている。

この「自己発見とキャリア開発」では、実際の職（仕事）の現場や様々な人との交流などの多数の活動を通して、本学での学びの基盤となる、自分の基礎能力、職（仕事）に関する様々な事柄、本学の学び、これらの関係性、に気づくこと、そしてその気づきを踏まえて、自身の将来の夢や目標、将来を見据えた４年間の学びの道筋、を獲得することを目的としている。

このうち基礎能力は、将来活躍できる社会人になることを見据えて、これから学びを進めていくうえで大切で必要である、と本学が考える幾つかの能力の総称である。それは、得られた情報や自分の考えなどを互いに言葉などで伝達し合う力（コミュニケーション力）、グループで協力して互いに信頼・共感し目的を達成するために行動する力（グループワーク力/チームワーク力）、社会人としても通用するルールやマナーを実行する力（常識力）、等の様々な行動の基礎となる能力である。加えて、自ら集めた情報やデータからこれまでとは異なる見方や物事、意味、本質を見出す力（気づき力）、興味や関心のあることに加え、将来の自分の可能性をさらに広げるために、今の興味の枠を超えて新たなことにも関心を持ち、それを知ろうと行動を起こす力（学び力）、等の「答え」を与えられない職の現場や大学での学びにおいて、それを自ら探し出すために重要となる能力も含まれている。

この科目では、講義中の様々な活動を通して、これらの基礎能力に気づくと共に、今後の継続的な向上のためのきっかけをつかみ、可能な部分はその向上を図ることもねらいの一つとしている。

２.「気づきのフィールド演習」の概要

「気づきのフィールド演習」は、学外演習プログラムとして実施されている。この科目では、「自己発見とキャリア開発」の目的と共に他プログラムの内容との整合性を踏まえ、数名のグループでの、実際に人々の活動する場における職・人・まち・空間など様々な対象の観察を伴う「フィールドワーク」とその結果をまとめたポスターを用いた「プレゼンテーション」を実施している。これらの活動を通して、職の現場を知ると共に、職と学びの関係性、学びの必要性などに気づき、自分の将来の夢や目標や学びの道筋を考えるヒントを得ることを目的としている。加えて上記の基礎能力のうちの幾つかの能力の意義に気づき、それを向上させることも狙っている。

「気づきのフィールド演習」の実施場所を表１に示す。本学の学びの特徴を踏まえ、商業施設およびその周辺が対象とされている。なお、「自己発見とキャリア開発」の実施方針により年度ごとに実施場所の見直しが行われた。

表１　気づきのフィールド演習の実施場所

	2015年度	2016年度	2017年度
1	デュオ神戸	阪急西宮ガーデンズ	阪急西宮ガーデンズ
2	umie	エキスポシティ	ららぽーと甲子園
3	メリケンパーク	IKEA神戸	IKEA神戸
4		神戸三田プレミアムアウトレット	神戸三田プレミアムアウトレット
5		三井アウトレットパーク・マリンピア神戸	三井アウトレットパーク・マリンピア神戸
6		天保山マーケットプレイス	神戸フルーツフラワーパーク
7		イオンモール明石	イオンモール明石
8		淡路サービスエリア	淡路サービスエリア
9		道の駅・みき	道の駅・みき
10		道の駅・あいおい白龍城	イオンモール神戸北
11			神戸空港

プログラムの大まかな流れを表２に示す。プログラムの基本的な流れは次のとおりである。①概要説明を実施する。②フィールドワークの実施場所に関する全体把握を行う。③グループごとに問題意識の検討や目的、観察方法などを決定する。④フィールドワークを実施する。⑤結果の整理・考察・まとめを行う。⑥ポスターの作成と発表会を行う。

表２　気づきのフィールド演習のスケジュール概要

コマ(90分)	2015年度	2016年度	2017年度
1	プログラム概要の説明	プログラム概要の説明	プログラム概要の説明
2			問題意識の検討と目的や観察方法の決定
3	実施場所全体の事前調査と調査エリア決定	フィールドワークの説明	事前調査(実施場所の情報収集，全体把握，実施計画や方法の検討，決定)
4		問題意識の検討と目的や観察方法の決定	
5	調査エリアの全体観察(全体把握と問題意識の検討と目的や焦点化観察の方法の決定)	学内でのフィールドワークの練習	フィールドワークの実施
6			
7	焦点化観察１回目	事前調査(実施場所の情報収集，全体把握，実施計画や方法の検討，決定)	結果の整理・考察・まとめとポスター作成
8			
9	焦点化観察２回目(１回目との比較やより深く広く観察するため)	フィールドワークの実施	プレゼンテーションの準備
10			
11	結果の整理・考察		ポスター発表会(対面発表と全クラスの見学)
12			
13	結果のまとめとポスター作成	結果の整理・考察・まとめとポスター作成	
14			
15	ポスター発表会(対面発表と全クラスの見学)		
16		プレゼンテーションの準備	
17		ポスター発表会(対面発表と全クラスの見学)	
18			
備考	フィールドワークの機会を多くとり，事前調査によりエリアを決定し，全体観察を通して問題意識や目的を得て，焦点化観察で対象を様々な視点や視野で観察・考察し，結果に至る流れとした.	対象を事前決定されたため，問題意識の検討や目的の設定を事前に実施した．それに基づく事前調査で対象の全体把握を行った．その上で，実施計画や観察内容や方法を検討した.	割当てコマ数が削減されたため，それぞれの項目を縮小した.

３.「気づきのフィールド演習」により育成される能力

(1)「自己発見とキャリア開発」の基礎能力

基礎能力の育成の点で、気づきのフィールド演習において上記のようなプログラム内容とした理由は、次のとおりである。

現場に赴くことで、机上では得られない実体験を得られること、現場の空間内を実際に移動することで対象を実際に様々な視点で見られること、新たな視点が得られることなどがフィールドワークを取り入れた理由である。

また一般にフィールドワークは、調査対象の場に入り込み、そこでの行動や出来事、文化、社会、人、事、物などを多様な視点や視野で「観察」し、そこから様々なことに「気づき」、それを「記述」すること、とされている。このため、気づきのフィールド演習におけるフィールドワークの体験は、基礎能力の一つである「気づき力」の意義に気づき、向上させるのに有効な手段と考えられるからである。また、問題意識や目的を自分なりに考えるために必要となる自ら対象をよく見ること事を通して、その「気づき力」の基盤となる「観察する力」の向上にも有効と考えられるからである。

またグループでの活動は、「グループワーク力」の向上はもちろんのこと、グループ内での意見発言や意見交換、意思決定、等の活動を通して「コミュニケーション力」の向上にも有効と考えられるからである。対面式のポスター発表では、他者の意見に耳を傾け理解することで、「コミュ

ニケーション力」の向上に有効と考えられるからである。演習を通して気づくことができた体験や新たな視点を得る体験、観察や考察を通して自分なりの結論を得る経験は、学ぶ楽しさを広げることにより「学び力」の向上につながると考えられるからである。

（2）課題遂行プロセスとの関係性

「気づきのフィールド演習」プログラムの活動において、問題意識や目的を自分なりに考え、決定する際に、対象に関する情報を収集し、自分なりの疑問をもって様々な視点や視野で考えることが不可欠である。その体験は、課題遂行プロセスにおける「②疑問を持つ」「③問いを立てる」「④の２）情報を収集する」「④の６）考察する」などの能力につながる貴重な体験と言える。

また、プレゼンテーションにおけるポスター作成は、観察した結果を考察し、まとめ、結論を導き出すことが必要となる。この体験は、「④の６）考察する」「④答えを導き出す」「⑤結論を導き出す」等の能力につながると言える。さらに、対面式のポスター発表は、「⑦他者に伝える」「⑧他者とのコミュニケーション」につながる体験と言える。

一方で、基礎能力のうち「気づき力」については、課題遂行プロセスにおける「疑問」や「問い」、「答え」、「結論」などそれを抱いたり、導き出したり際に、基盤となる能力と言える。「コミュニケーション力」は、結論を他者に伝え、他者の意見を聞き幅広い視点を取り入れるのに不可欠な能力と言える。一般に課題遂行にあたり一人で活動することはまれであり、グループ活動が基本となることを踏まえると、「グループワーク力」は重要な能力と言える。課題遂行にあたり必要となる知識や技術、スキルが不足している場合、それを素早く修得することが求められる。その際、「学び力」はかなり有効な能力になると思われる。

以上のことから、気づきのフィールド演習は、自己発見とキャリア開発の目標として設定された基礎能力の育成だけでなく、その発展的な位置づけにある課題遂行プロセスにおけるいくつかの能力の育成にも有効と考えられる。

Ⅲ．フィールドワークを伴う課題演習による能力育成の可能性

１．課題演習の概要

今回の課題演習は、１年生前期での気づきの教育でのフィールドワークの経験に加え、これまでの学部の授業による学びや様々な体験・経験をいかして学外でのフィールドワークを行うことで、新たな学びを得ることを目標とした。

対象は、気づきの教育を経験した商学部、経済学部、人間社会学部の学生とした。フィールドワーク実施場所は、気づきの教育でのフィールドワークプログラム実施内容をふまえて、さらに学びの発展をめざし応用可能性のある場所について検討した。その結果にもとづき、各学部の専門教育をいかせるフィールドワーク実施場所として、エキスポシティと京都市街地を選定し、フ

ィールドワークを実施した。フィールドワークにおける課題に関しては、教員は指導や指示はできるだけ行わないようにし、学生本人が主体的に興味を持った学びたい内容に合わせて、課題を探しだし、気づき、見つけ出すようにうながした。

また、フィールドワークから着想した課題遂行プロセスをもとに質問紙を作成し、大学 4 年間での学びの各段階においてどの程度問題解決能力が獲得されているかを随時確認していく手段の 1 つとして質問紙調査も実施した。質問紙調査は、複数回フィールドワークを経験した場合と 1 年生前期の気づきの教育のみの場合を比較するため、フィールドワークを 1 度しか経験していない学生に対しても行った。

今回の課題演習の結果を検討するため、以下の 3 種類の対象を設定した。

【対象１】2 年生（25 名）：京都市街地（2016 年 12 月 18 日、10 時～16 時）

複数回のフィールドワークと質問紙調査を実施した。実施時は 2 年生であり、今回の課題を含めると 1 年生と 2 年生でそれぞれフィールドワークを経験した学生である。彼/女らは、1 年生後期に加え 2 年生前期にある程度学部専門教育を受けている。フィールドワーク実施後に、質問紙調査を行った。

演習を行うにあたり、以下の点を学生に伝えた。

- 学部の授業で学んだ内容をいかして、自分の興味やグループで活動する場合はメンバーの関心も考慮して問題意識を設定すること。
- 事前準備や現地での調査内容や方法などはすべて、自分たちで決めること。観光や買い物、飲食をすることでフィールドワークを行うことも可能である。
- 実施期間は 1 日のみで、設定されたエリア内であればどこで実施してもよい。
- フィールドワーク実施後は、パワーポイントを使用してプレゼンテーションを行うこと。

【対象２】1 年生（30 名）：エキスポシティ（2016 年 12 月 10 日、10 時～16 時）

複数回のフィールドワークと質問紙調査を実施した。実施時は 1 年生であり、今回の課題を含めると 1 年時前期と後期にそれぞれフィールドワークを経験した学生である。彼/女らは、1 年生前期に受講した気づきの教育での商業施設におけるフィールドワークの結果を再考し、より発展的な活動となるよう商業施設で実施した。フィールドワーク実施後には、質問紙調査を行った。

演習を行うにあたり、以下の点を学生に伝えた。

- 気づきの教育（1 年生前期）で行ったフィールドワークで学んだ内容をいかして商業施設としての比較や前回調べきれなかったことを再考して問題意識を設定すること。
- 事前準備や現地での調査内容や方法などはすべて、自分たちで決めること。観光や買い物、飲食をすることでフィールドワークを行うことも可能である。

・　実施期間は 1 日のみで、設定されたエリア内であればどこで実施してもよい。
・　フィールドワーク実施後は、パワーポイントを使用してプレゼンテーションを行うこと。

【対象３】1 年生（57 名）：追加フィールドワークは未実施
質問紙のみを実施した。
実施時は、1 年生であり、1 年生前期の気づきの教育でのフィールドワークのみを経験した学生である。

２．フィールドワークを伴う課題演習の実施結果

複数回フィールドワークを行った【対象１】【対象２】においては、今回の課題演習の対象としたフィールドワークについて、実施報告会を行った。

【対象１】では、学生自らが考えたフィールドワークの問題設定において、商学部、経済学部、人間社会学部の違いが明確に表れた。具体的な問題設定内容は、商学部では、「京都四条通りにおける百貨店の比較」や「コンビニエンスストアの比較」、経済学部では、「駅及びその周辺における交通バリアフリーの実態：三条駅周辺の主要鉄道駅」、人間社会学部では、「京都の四条通りと裏通りのカフェメニューと客層の違い」「鴨川における等間隔の法則の再検証」「京都の神社と寺におけるサービスの違い」などとなった。これらの問題設定のありかたから、京都市街地という一定の地域であっても、2 年生後期の時点で、学部専門教育をある程度いかしたフィールドワークを行うことができることがわかる。

さらに、フィールドワークを行うだけでなく３学部合同の報告会を行うことによって、学生自身もそれぞれの学部や専門の特徴に自ら気づき、教員からの指導ではなく、学生が相互に主体的に学ぶ場を作りだすことができた。参加した学生からは、「あらためて、自分たちの興味・関心の特徴がわかった」「同じ学年でもこんなに学んでいることが違うとは思わなかった」「自分たちが当たり前に知っていることでも、ほかの学部の人に伝えるのはすごく難しいことがわかった」などの感想が聞かれた。

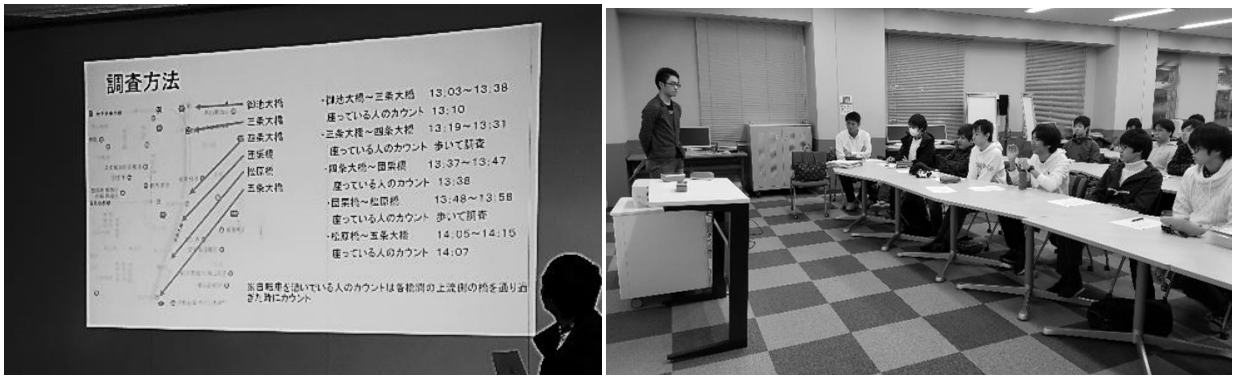

図２　2 年生におけるフィールドワーク合同報告会の様子

【対象２】は、1 年生の後期ということもあり、前期の「気づきの教育」でのフィールドワークからの変化を学生自らが感じることができる結果となった。具体的には、最終報告におけるタイトル名や問題意識に変化がみられた。1 年生前期では「人気店の共通点と新たな発見」「マリンピア神戸のバリアフリー」「売り方の視点から見たマリンピア神戸内の店舗比較」などのような表面的な問題設定であったが、1 年生後期では「マリンピア神戸と比較してみるエキスポシティの特徴」「さまざまな人（人種、信条、性別、社会的身分、門地、障がい、ペット、など）が快適に過ごせるための工夫」「実際に体験して商品開発や店舗企画の工夫を知る」「どんな商品を販売しているか ?逆にどんな商品が販売されていないか ?」など、より具体的で広範囲の視点から問題設定を行うことができるようになった。また、参加学生からは、「気づきが多くなった」「時間を有効活用できた」「前回のフィールドワーク場所と比較することができた」「前回のフィールドワークよりもメンバーとの関係が深まった」などの意見がきかれた。

このような結果から、同じ学年で複数回のフィールドワークを行う場合は、【対象１】の専門教育の違いのように明確に差異から学び合うのではなく、自分自身における基礎能力の変化に気づくことができる機会ととらえることができる。それぞれのフィールドワークを行う期間の長短によって、異なる気づきが得られるのかもしれない。

なお、【対象３】は、追加フィールドワークは未実施であり、1 年生前期の気づきの教育でのフィールドワークのみを経験した学生であるため、質問紙のみとなっている。

３．フィールドワークを通して育成される能力についての質問紙調査の結果

(1) 質問紙調査の概要

質問紙調査では、図１の課題遂行プロセスのそれぞれの能力に対応する「①何事にも興味を持つ力」「②疑問を持つ力」「④２）４）情報を集め、データを作成する力能力」「④５）６）データを分析、考察する力」「⑦⑧結果を他者に伝え、コミュニケーションをとる力」に対する学生の認識や自己評価について調査した。実際の質問項目では、それぞれの力について「あなたには、現時点で、この力がどの程度あると思いますか」との問いに、「全くない」から「非常にある」までの 5 件法で回答してもらった。

調査は、【対象１】は 2016 年 12 月、【対象２】【対象３】は 2017 年 1 月に実施した（図３）。以下、結果に記載の、1 回実施とは「気づきの教育」でのフィールドワーク経験のみの学生を、2 回実施とは「気づきの教育」でのフィールドワークに加えて課題演習としてさらにフィールドワークを行った学生をさしている。

また、フィールドワークを伴う課題演習の具体的な実施内容や「⑦⑧結果を他者に伝え、コミュニケーションをとる力」の変化に関しては、（1）「２．フィールドワークを伴う課題演習の実施の結果」の通りである。

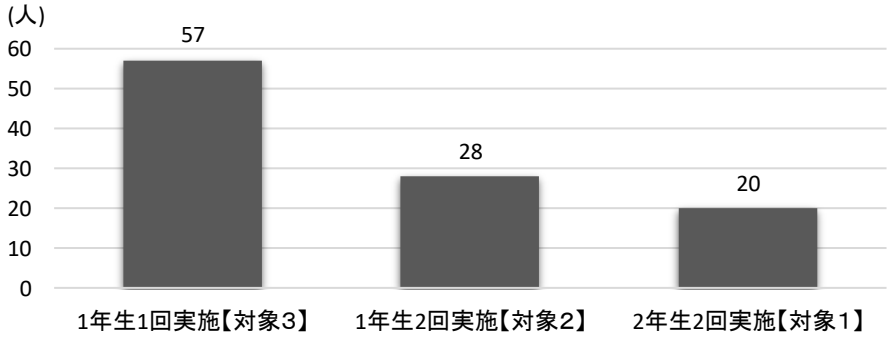

図３　フィールドワーク回数別　質問紙実施人数

（2）質問紙調査の結果と考察

質問紙調査で行った、学生の認識や自己評価についての結果をみていく。ここでは、フィールドワークの経験を継続的に行うことによる学生の認識の違いについて、【対象３】（フィールドワークを「気づきの教育」のみでしか行っていない学生）と比較することで明らかにする。

課題遂行プロセス「①何事にも興味を持つ」能力については、図４のような結果となった。

「①何事にも興味を持つ」能力においては、フィールドワーク実施回数による差はあるが、すべての対象の学生が、6 割以上「少しはある」「非常にある」（以降「ある」）と回答している。ここから、フィールドワークを行うことによって興味関心を持つ能力を養うことができることがわかる。そして、あまり差はないが【対象２】においては、82.2%の学生が「ある」と回答していることから、あまり期間を開けずに複数回のフィールドワークを行うことによって、学生自身が興味を持つ能力を実感することができると思われる。

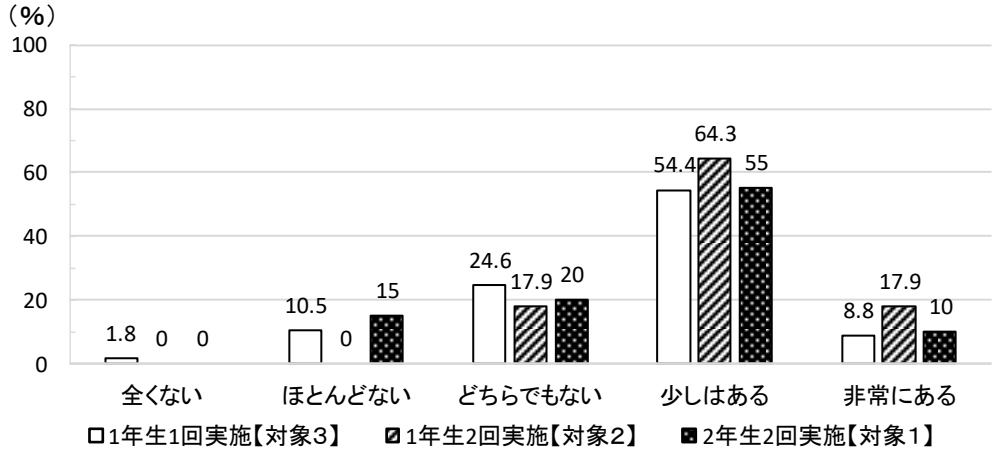

図４　①何事にも興味を持つ能力

次に、課題遂行プロセス「②疑問を持つ」能力については、図５のような結果となった。

「①何事にも興味を持つ」能力と同様に、「②疑問を持つ」能力においても、フィールドワーク実施回数による差はあるが、すべての対象の学生が、５割以上「少しはある」「非常にある」と回答している。ここから、フィールドワークを行うことによって興味関心を持つ能力を養うことができることがわかる。しかし、「ある」と回答している学生は「①興味を持つ」ことに対して 10 ポイントほど減少しており、「①興味を持つ」ことと「②疑問を持つ」ことは同じではなく、疑問を持つ方が身につきにくいと考えている様子も見て取れる。そして、この能力に関しても、【対象２】の学生が多く回答していることから、あまり期間を開けずに複数回のフィールドワークを行うことで、学生自身が疑問を持つ能力を実感することができると思われる。

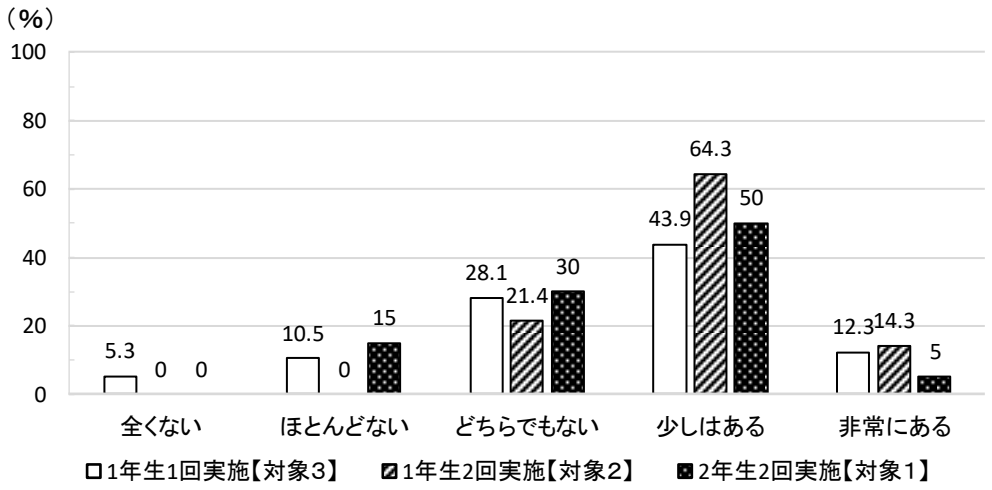

図５　②疑問を持つ能力

「④問いに対する答えを導き出す」に関しては、項目が複数あるため、「２）情報を集める」「４）データを作成する」と「５）分析する」「６）考察する」をそれぞれまとめて質問項目とした。「２）情報を集める」「４）データを作成する」にあたる部分に関しては、図６のような結果となった。

図６からは、情報を集めデータを作成する能力が、複数回のフィールドワークを行うことで明確に実感されていることがわかる。「ある」と回答した％を比較してみると、【対象 1】44.8%、【対象２】60.7%に対して、【対象３】は 38.6%となっている。さらに、【対象３】の 3 割が能力がないと回答していることからも、実際に現場へ赴きフィールドワークを行うことは、データを収集し作成する能力の育成に影響していると考えられる。

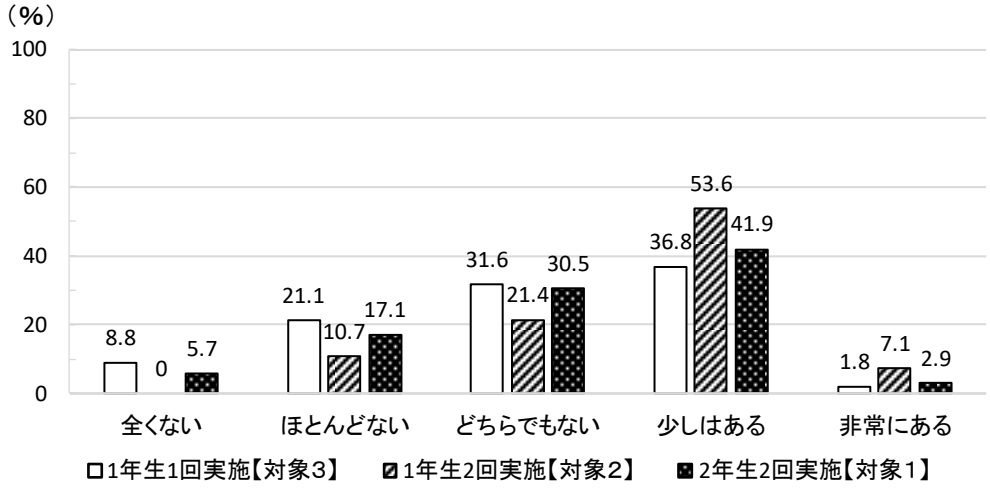

図６　④2）4）情報を集め、データを作成する能力

図７は、「④問いに対する答えを導き出す」の「５）分析する」「６）考察する」に関する結果である。分析し考察する能力では、図６の情報を集めデータを作成する能力以上にフィールドワークの経験による差がみられた。図７で「ある」と回答した%を比較してみると、【対象 1】42.9%、【対象２】60.7%に対して、【対象３】は 31.6%と図 6 の「２）情報を集める」「４）データを作成する」に比べてさらに減少している。さらに、この段階の能力に関して【対象３】の学生は、能力が「ある」か「ない」かの判断がつかないとする「どちらでもない」の割合が 10 ポイント以上増加していることも興味深い。

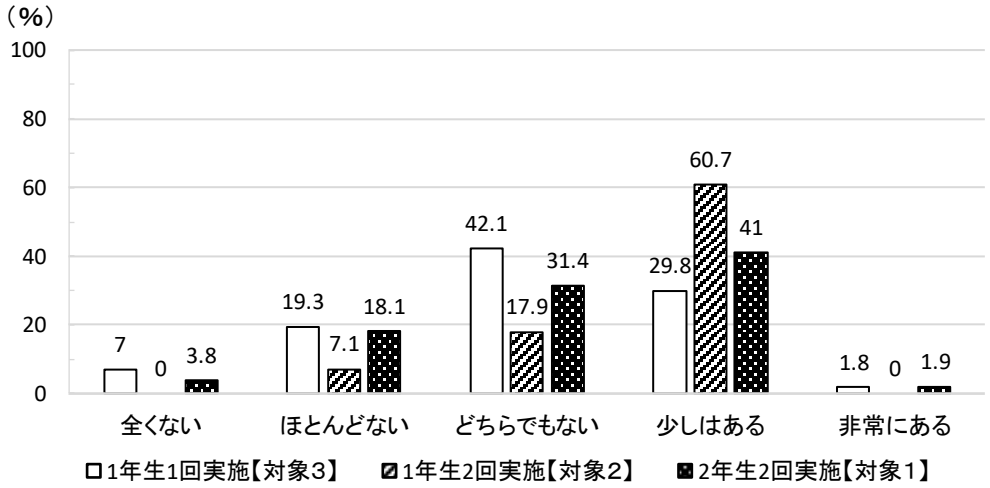

図７　④5）6）データを分析・考察する能力

（3）質問紙調査の結果のまとめ

現在の調査段階では、対象となる学生が 2 年生までと限られていたため、想定した課題遂行プロセスを実行するための能力に対する自己評価は、「④問いに対する答えを導き出す」までしか行うことができなかった。だが、ここまでの結果からも、フィールドワークを継続的に行うことで課題遂行能力が育成されていることがわかる。さらに、想定した課題遂行プロセスの段階が進むごとに、フィールドワーク経験回数によって能力に対する自己認識に明確な差があったことから、想定した課題遂行プロセスがある程度妥当なものであるということができるのではないだろうか。加えて、フィールドワークを行うことの効果は、学部による専門の違いを超えて、実感されるものであると期待できると考えらえる。

Ⅳ．おわりに

今回、1 年生前期に実施されている「気づきの教育」でのフィールドワークの経験をいかし、多様な場面で応用可能な課題遂行能力育成のためのフィールドワークの可能性について検討した。

まず、フィールドワークを伴う課題演習の実施結果からは、2 年生後期の時点で、商学部、経済学部、人間社会学部のすべての学部において、学部専門教育をある程度いかしたフィールドワークを行うことができることがわかった。さらに、フィールドワークを行うだけでなく三学部合同の報告会を行うことによって、学生自身がそれぞれの学部や専門の特徴に自ら気づき、相互に主体的に学ぶことが可能となった。1 年生後期の時点では、学部専門教育をいかすことは難しかったが、その代わりに学生自身が自分の変化についてより認識する結果となっていた。

つぎに、質問紙調査の結果からは、フィールドワークを継続的に実施することで、自らの課題遂行能力が得られたととらえる学生が増加することがわかった。

今後の課題として、調査対象者の人数だけでなく対象学年を増やし、大学 4 年間を通した課題遂行能力育成について調査していく必要がある。その際、今回は調査できなかった想定した課題遂行プロセスの「⑤答えから疑問に対する結論を導き出す」、「⑥自分自身で結論を評価する」、「適切なフィードバックの実行（図１における２つのフィードバックプロセスについて）」などについて、よりデータを蓄積し分析していかなくてはならない。加えて⑨各行動において状況に応じて ICT を活用することは、重要な基礎能力の 1 つであるため、今後、ICT をフィールドワークの活動（現地での複数チーム間の通信を使った情報共有、調査結果の整理、中間時の資料作成など）で用いることによる結果も分析していきたい。

さらに、本学の「気づきの教育」でのフィールドワークの経験からの学びの可能性を広げるために、4 年間の学びの各段階に対応したフィールドワークのさらなる応用可能性の検討と試行を

行っていきたい。さらに、大学在学中だけでなく、卒業し社会人となった時に、獲得した課題遂行能力をどのように現場でいかすことができるかに関しても、今後調査していく計画である。

これからの現代社会を担う社会人の育成を大学教育がめざすうえでは、多様な場面で応用可能な課題遂行能力育成することを意識したフィールドワークが経験できる授業を、大学 4 年間のできるだけ早い段階から専門科目も含めて実施することが望ましいのではないだろうか。特に、このような授業は、1 回だけでなく複数回継続して行うことによって、効果が発揮されるものであると考えられる。また、このような経験によって身についた様々な能力は、大学での各段階の学びにおいて活用することができるだろう。そこで、大学入学時の初期段階だけでなく、それぞれの学部の専門科目の修得時においても有効であろう。

謝辞

教養演習（三谷クラス・池田クラス・伊藤正隆クラス）の受講生には、フィールドワーク課題演習と質問紙調査にご協力いただいた。研究遂行にあたり流通科学大学・経済学部・中島孝子氏、京都産業大学・伊藤正孝氏（当時、流通科学大学・商学部）には、多数のご助言やご協力をいただいた。本研究の一部は、流通科学大学・教育実践推進費の助成を受けて実施したものである。ここに記して関係各位に感謝の意を表する。

引用・参考文献

1）本田由紀（2008）『「家庭教育」の隘路』勁草書房

2）佐藤郁也（2002）『フィールドワークの技法』新曜社

3）宮道力・三浦孝仁・坂入信也・中山芳一・岡山大学キャリア開発センター・朝日医療学園（2013）「企業における採用活動の実態と新規学卒者に求める能力に関する実態調査報告」『大学教育研究紀要』第 9 号、pp.233-244

4）流通科学大学・教務委員会・初年次教育専門部会（2015）「2015 年度・流通科学大学・職と学びの気づき・気づきのフィールド演習」『自己発見とキャリア開発（１年前期開講科目）』

5）流通科学大学・教務委員会・初年次教育専門部会（2016）「2016 年度・流通科学大学・職と学びの気づき・気づきのフィールド演習」『自己発見とキャリア開発（１年前期開講科目）』

6）流通科学大学・教務委員会・初年次教育専門部会（2017）「2017 年度・自己発見とキャリア開発・３．将来のための自分の基盤づくり・(4) 気づきのフィールド演習」『自己発見とキャリア開発（１年前期開講科目）』